

アタール

チェロ協奏曲〈アル・イシャー〉(日本初演)

フランス南部トゥールーズ出身の作曲家バンジャマン・アタール(1989～)は、レバノンの首都ベイルートにルーツを持つ。チェロ協奏曲〈アル・イシャー〉には、作曲家のそうした多文化性が色濃く反映されている。

2015年ごろから本格化した作曲活動は、17年に大きな山場を迎えた。1日5回のイスラム教の祈りを、一連の音楽作品としてシリーズ化する企画を始めたのだ。きっかけはダニエル・バレンボイムとブーレーズ・アンサンブルによる作品委嘱だった。

バレンボイムがアタールにほぼ無条件で作曲を任せただけで、作曲家自身は少し困惑したようだが、すぐに先述のアイデアにたどり着いた。それを引き出したのは、ベイルートで聞いたムアッジン^{ろうしゅうしや}の声だったという。ムアッジンはイスラム教の祈りの時を知らせる朗誦者。モスク(イスラム寺院)の尖塔からアザーンを吟じ、礼拝への参加を呼びかける。アラブ諸国やトルコ、インドネシアなど、イスラム圏の街で頻繁にその声を聞くことができる。最近は録音をスピーカーで流すことも多いが、かつてはよく通る甲高い肉声でその都度、アザーンを詠じていた。

アタールは夜明けの呼びかけ「ファジュール」(アッラーは偉大なり……救済のために来たれ……礼拝は睡眠に優る……アッラーのほかには神はなし)を耳にして目を覚まし、シリーズ化の構想を胸に抱いたらしい。ファジュール(未明)、ズフル(明け方)、アスル(午後)、マグリブ(日没後)、イシャー(夜)の5度の礼拝を、1曲ずつ音楽にするプロジェクトがここにスタートする。

まずバレンボイムの委嘱に応じてピアノ協奏曲〈アル・ファジュール〉、続いてアロド四重奏団のために弦楽四重奏曲〈アル・アスル〉、そしてリール国立管弦楽団の委嘱によりセルパン協奏曲〈アズフル〉を書き上げた。いずれも17年のことだ。20年に入り、アメリカの美術館ザ・フィリップス・コレクションのためにオーボエ無伴奏曲〈アル・マグリブ〉、ラジオ・フランスの委嘱に対してチェロ協奏曲〈アル・イシャー〉を作曲した。これで祈りのサイクルが閉じたことになる。

作曲家はチェロ協奏曲について次のように語る。「(夜中の礼拝にあたる)〈アル・イシャー〉は深く暖かい夜へと飛び込む作品」「その日を締めくくる最後の呼びかけ

にあたる。それにより「(今日という)あるひとつの感覚、ひとつの色彩から、(明日という)また別の感覚、別の色彩へと移ろっていく」。アタール自身は作品をこのように捉えた。

こうした未来志向は、音楽上の構成にもあらわれている。作曲家はこう言う。「音楽によく耳を傾けると、忘れかけていたイディッシュ(中・東欧ユダヤ文化)の旋律、夢のようなグレゴリオ聖歌のクラウズラ(単旋聖歌を多声化した内の一声部を独立させたもの)、街の四方に余韻を残すムアッジンのアザーンが聞こえる。「ひとりは大勢、大勢はひとりへと移り変わり、(イディッシュ、クラウズラ、アザーンの)三者が融合する」。つまり作曲家はこの作品で、(啓典を共有する)ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の合一する“明日”を夢見ている。これは、レバノンにルーツを持つフランス生まれの作曲家という多文化的性向を、健全な楽観主義のもと音楽に埋め込んでいるということだろう。

曲は単一楽章。四分音符毎分58回の部分を中心としたまとまりを4度、演奏する(「テンポ・プリモ(冒頭のテンポに戻す)」の指示が3回ある)。これは「(ムアッジンが)『アッラーは偉大なり』の宣言を4回繰り返す」ことに起因している。この4回を作曲家は「つねに同じ時間であり、つねに新しい時間である」とする。

チェロの低・中・高音域はそれぞれ、イディッシュの旋律、クラウズラ、アザーンに対応しているようだ。とくにその高音域は、往時のムアッジンの甲高い声を想起させ、興味深い。結尾部では、独奏・総奏ともに低い音域から高い音域へと上行を繰り返す、三者の融合を印象づける。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：2020年/初演：2021年2月6日、パリ/演奏時間：約30分
楽器編成/フルート2(アルトフルート持替、ピッコロ持替)、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2(バスクラリネット持替)、ファゴット、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(大太鼓、フレームドラム、シンバル、サスペンデッド・シンバル、クラッシュ・シンバル、チャイニーズ・シンバル、シズル・シンバル、グロックンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、銅鑼、クロテイル、ドラブッカ)、ハーブ、ピアノ、弦五部、独奏チェロ

ベートーヴェン

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55 〈英雄〉

「英雄」とは誰を指すのか。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)は〈英雄〉作曲のきっかけをフランス軍の元帥ジャン=バティスト・ベルナドットから得た、と“伝記作家”のシンドラーは言う。総譜にナポレオン・ボナパルトへの献辞が添えられたことから、この稀代の革命家こそ「英雄」だとする考えもある。

楽曲の構成の点から「英雄」の正体に迫ることもできる。鍵は数字の「3」だ。「英雄」はベートーヴェンの3番目の交響曲、変ホ長調で調号はフラット3つ、始まりは4分の3拍子、異例の楽器編成であるホルン3本。「英雄」には「3」がちりばめられている。

19世紀初めのウィーン市民が「3」と聞いて思い浮かべるのは、まず「フリーメイソン」だろう。自由・平等・友愛の旗印はもちろん、三角形に3つの目と、象徴的な「3」には事かかない。フランス革命を候補に挙げてよい。自由・平等・博愛の3つの理想を掲げ共和主義を追求した運動に、ベートーヴェンは共鳴した。だから第3番の「英雄」とは、革命を成し遂げた市民だと言っても、あながち間違いではない。

がいぜんせい蓋然性が高いのは、キリスト教の「三位一体」である。音楽修辭学の伝統に従えば、変ホ長調の3つのフラットは、父・子・聖霊の三神格を示す。わざわざホルンを3本使うことも興味深い。加えて注目すべきはその配置だ。通常ならば1番・2番・3番(3番・2番・1番)と座る。しかし、ベートーヴェンは1805年、浄書譜の扉に「3本のホルンは第1奏者を中央に置く」と記した。これに従えば席順は2番・1番・3番(3番・1番・2番)ということになる。メモだけでなく浄書譜そのものからもこの配置がうかがえる。作曲家はホルンパートを上から、3番・1番・2番の順で書いた。この席順の見た目は、三位一体または磔刑の図像表現を強く思わせる。

この観点から各楽章を眺めると、興味深い関係が見えてくる。ユダヤ教に波乱を起こした布教活動、ゴルゴタへの道行と十字架上の死、復活と昇天。キリストの生涯がうっすらと浮かび上がる。「英雄」はキリストを指しているのではないか。もちろんこれはファンタジーなのだが、それなりの根拠に基づいている。仮説のひ

6/13
定期

Program Notes

とつとしてもよいだろう。

ベートーヴェンは交響曲を、貴族や資産家の邸宅で演奏することがあった。1804年の初夏、〈英雄〉をウィーンのロブコヴィツ侯爵邸で試演した後、同年夏にチェコ・ロウドニツェのロブコヴィツ城で私的に初演した。さらに翌年1月、ウィーンの銀行家ヨーゼフ・フォン・ヴェルトの邸宅での演奏会でも披露する。

次の批評は05年のヴェルト邸演奏会の様子を伝えている。「この作品ではどぎつさや奇抜さが余りにもしばしば見られ、そのことによって見通しが極めて難しくなり、統一がほとんど失われている」(『総合音楽新聞』1805年2月13日号)

引用部分の前段でも「長い」「演奏が難しい」「無秩序」と散々の書かれようだが、逆にこの作品で、ベートーヴェンが従来の交響曲の概念をひっくり返してしまったことがよく分かる。批評家は〈英雄〉に否定的な見方をしているが、「大変な喝采を受けた」という記録もあり、耳新しさを喜んだ聴衆もいた。

第1楽章、延々と続くヘミオラ(小さな3拍子2つを大きな3拍子1つと取るギアチェンジ)には演奏者ですら参ったとの報告が残る。作曲家の弟子フェルディナント・リースは、再現部直前、弦楽に主題が回帰する数小節前にホルンが“フライング”する場面を、ベートーヴェンの「意地悪」として回想している。

第2楽章は短短短長のリズムが耳を引く葬送行進曲。長調の中間部では、それを舞曲ジーク風の長短リズムに衣替えさせて、推進力を保つ。

第3楽章のスケルツォでは名前の通り「冗談」めいた楽想が続く。その突然のギアチェンジなどが聴き手をまごつかせる。

第4楽章も変奏曲仕立ての興味深い構成。低音のテーマだけを示したあと、さまざまな横顔の変奏を続ける。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1803~04年／初演：1805年4月7日、ウィーン(公開初演)／演奏時間：約47分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦五部